

国立国語研究所学術情報リポジトリ

日本におけるじゃがいも方言の分布と変化：弱い固有名詞の強い力

著者	大西 拓一郎
ページ	1-10
URL	http://doi.org/10.15084/00003041

日本におけるじゃがいも方言の分布と変化

—弱い固有名詞の強い力—

大西拓一郎
国立国語研究所

要旨

「じゃがいも」は、「さつまいも」「とうがらし」「とうもろこし」「かぼちゃ」などと同様にアメリカ大陸が原産地で、大航海時代以降にヨーロッパ経由でアジアに導入された渡来作物のひとつである。渡来作物の中でも、「じゃがいも」は日本国内での普及が遅く、近世の方言辞典に掲載されていないことや方言量の多さがそれを反映している。渡来作物の方言形には、固有名詞が含まれていることが多い。特に「じゃがいも」の方言形の場合、それが顕著であり、他の渡来作物よりも日本国内の地名（固有名詞）が多く見られるとともに、他の渡来作物にはほとんど現れない人名（固有名詞）が多く確認される。方言の変化を考える上で、このような固有名詞の存在が大きな鍵となる。とりわけ、救荒作物（飢饉対策作物）としての「じゃがいも」の普及において、起点になったと見なされる固有名詞の地名「甲州」ならびに人名「清太夫」が、いずれもあまり著名ではない「弱い固有名詞」であったことが民間語源や類音牽引といった言語変化を引き起こし、さらには作物の特性に基づく語形との混交が相俟って、多様な方言形が生み出された。このような固有名詞による命名を検討すると、地名と人名の分布には異なる地理的特性が確認される。これらの変化と分布について考察を行う。

1. はじめに—渡来作物としての「じゃがいも」—

16 世紀末、ヨーロッパ人が東アジアにやってきて、それまでになかった作物をもたらした。「じゃがいも」「さつまいも」「とうがらし」「とうもろこし」「かぼちゃ」がその代表である。実はこれらの作物の原産地は、ヨーロッパではない。ヨーロッパ人が 15 世紀の大航海時代にアメリカ大陸に進出し、そこから持ち帰ったものを東アジアに持ち込んだ。したがって、これらはいずれもアメリカ大陸が原産地である。このような中世から近世にかけて、ヨーロッパとの交流を通して伝えられた作物は、渡来作物と呼ばれる（佐藤 1979）。

現在の東アジアにおいて、渡来作物は十分に定着し、ときにはそれぞれの地域固有の作物とも捉えられがちである。たとえば、「とうがらし」は、韓国や中国の食文化を語る上では欠かすことができない。しかし、それは、中世以前にさかのぼることはない。ヨーロッパにおける「じゃがいも」も同様であり、現在は特に北ヨーロッパで主食の地位を得ているが、それも太古の食文化を継承するものではない。

渡来作物は様々あるが、全部が一度に広まったわけではない。特に日本における「じゃがいも」は、その他の作物に比べて、定着が遅かった。財団法人いも類振興会編（2012）ならびに山本（2008）を参照すると次のようである。

原産地の南米からヨーロッパ（オランダもしくはポルトガル）経由で 17 世紀中頃に日本に伝わり、冷涼な気候に強いことから、米の不作による饑饉対策の救荒作物として広まった。しかし、それは散発的であり、本格的な栽培は、明治時代以降（19 世紀中頃以降）、北海道開拓入植者の主要食糧として定着をみた。第一次世界大戦（20 世紀初頭）以降、繊維産業用のでんぷんの輸出に向けて作付面積が急増した。

『物類称呼』は越谷吾山により編纂され、1775年に刊行された日本の全国方言集である。渡来作物の「さつまいも」「とうがらし」「とうもろこし」「かぼちゃ」の方言は取り上げられている。ところが、「じゃがいも」は扱われていない。これは1775年の時点では、「じゃがいも」はまだ、方言ができるほどの普及していないことによると考えられる。また、国立国語研究所が1960年前後に2400地点を対象とした全国的な調査を行い、それをもとに作成した方言地図集である『日本言語地図』（LAJ）に基づき渡来作物の方言形がどれくらいあるか、すなわち方言量（柳田1930・1940）を見てみる。すると、「じゃがいも」（238）、「さつまいも」（120）、「とうがらし」（60）、「とうもろこし」（187）、「かぼちゃ」（100）であり（括弧内は凡例に登載されている方言形の語数）、「じゃがいも」がもっとも多い。これは、「じゃがいも」の全国的な普及が比較的遅く、流通市場での歴史が浅いことに起因するのではないかと考えられる（宮本1962）。

2. 渡来作物方言の語構成と「じゃがいも」方言の特性

日本語標準語の渡来作物名は、いずれも固有名詞が含まれている。「じゃがいも」のジャガはインドネシアのジャカルタの旧称であるジャガタラ、「さつまいも」のサツマは鹿児島県西部の旧称、「とうがらし」と「とうもろこし」のトウは中国の旧国名、「とうもろこし」のモロコシも中国の古称、「かぼちゃ」はカンボジアである。ただし、それらの地名は移入元を指していたとは必ずしも言えない点には注意が必要である（大西2018）。むしろ、命名時の海外に対するエキゾチックな意識が働いていたと考える方が妥当であろう。

渡来作物について、LAJに現れる方言形の中で外国地名がどの程度現れるかを示したのが表1である。ここには地点数の上位10位までのものについて、対象とする作物の項目ごとに使用地点数の割合（%）で示した。

作物ごとに異なりがあり、「じゃがいも」の場合はジャガタラ、「さつまいも」の場合は中国の古称であるカラ、「かぼちゃ」の場合はカンボジア、「とうもろこし」と「とうがらし」の場合はトウと東南アジアを指すナンバンが多いことがわかる。

表1 渡来作物の方言に含まれる外国地名（LAJにおける地点数の上位10位、単位は項目ごとの使用地点の割合）

	トウ(唐)	カラ(唐)	高麗	朝鮮	琉球	ジャガタラ	カンボジア	南京	モロコシ	南蛮
じゃがいも	0.08%	4.42%		0.17%	0.33%	68.54%		0.04%		
さつまいも	5.67%	10.71%			7.08%					
かぼちゃ	9.50%	0.21%		0.79%			68.53%	14.13%		1.08%
とうもろこし	62.42%	0.08%	3.54%					0.04%	17.54%	20.50%
とうがらし	43.90%	0.59%	1.51%							34.45%

日本国内の地名も渡来作物の方言名に現れる。ただし、例外的に多い「さつまいも」のサツマを除くと外国地名よりもはるかに少ない。表2には、LAJにおいて渡来作物の方言名に現れる国内地名を（表1に合わせて割合で示すと数値が小さすぎてわかりにくくなるため）地点の実数で示した。

ここにも作物ごとの異なりがあるが、外国地名の場合と違って、そもそも国内地名が現れるかどうかの差が大きい。「とうがらし」にはまったく現れない。「かぼちゃ」と「とうもろこし」には現れるが、種類が少なく、「さつまいも」の場合も例外的なサツマ（薩摩）

を除くと同様である。

その中で「じゃがいも」は特殊である。多様な国内地名が現れている。特に東北地方の「仙台」、中部地方で現在の山梨県にあたる「甲州」、現在の滋賀県にあたる「江州」が地点数も多い。

表 2 渡来作物の方言に含まれる国内地名（LAJ における地点数）

	薩摩	仙台	甲州	江州	大和	信州	信濃	九州	日向
じゃがいも		14	13	12		8	6	2	2
さつまいも	1715							3	2
かぼちゃ	9								
とうもろこし					8				
とうがらし									
	善光寺	北海道	五島	伊勢	敦賀	四国	札幌	関東	越後
じゃがいも	4	3	1	2	2	2	1	1	1
さつまいも			2						
かぼちゃ									
とうもろこし									
とうがらし									
	能登	駿府	名古屋	紀州	備後	竹島	相良	長崎	大村
じゃがいも	1			1	1	1	1	1	
さつまいも			1						1
かぼちゃ		1							
とうもろこし									
とうがらし									

さらに、「じゃがいも」の方言には、人名が多く現れるという特徴がある（表 3）。他の渡来作物名+には人名はほとんど現れない（「かぼちゃ」に見られるキントは、坂田金時（中世初期の武士）かもしれないが、ナンキン（南京）とトウ（唐）の混交の可能性もある）。

表 3 「じゃがいも」の方言に含まれる人名（LAJ における地点数）

清太夫	弘法	大師	孔子	ごろう	ごろうざ
20	68	6	17	4	3
ごろうた	ごんざ	ごんすけ	へえろく	やごろう	男爵
1	1	1	1	1	1

以上のように渡来作物の方言名には、固有名詞が多く現れるという特徴がある。そして、その多くは外国地名である。ところが、「じゃがいも」においては、(1)多様な国内地名の現れるという点と(2)人名が現れるという点に他の渡来作物とは異なる特性があることがわかる。

3. 甲州の清太夫

「じゃがいも」の方言に現れる人名の「清太夫」は、甲州（こうしゅう：現在の山梨県）の代官（江戸時代において江戸の幕府（中央政府）が直轄地である天領を統括するために派遣した中央官僚で、数年ごとに交替する）である中井清太夫（なかいせいだゆう）である。

中井清太夫は 1777 年～1787 年に甲州の代官を務めた。日本はこの時期、しばしば不安定な気候に見舞われ、米の不作に起因する饑饉が発生していた。山岳地帯が多く気候が冷

涼な甲州においても饑饉のために民が多く餓死する危機に陥っていた。

中井清太夫は、幕府の許可のもと、飢饉対策として、寒さに強い「じゃがいも」を九州から取り寄せ、甲州に広めることで、民を饑饉から救った（手塚編 1978）。そのことから山梨県上野原町の龍泉寺には、中井清太夫を「芋大明神」として祀る石碑も建立されている（小林 1987）

しかし、そのような石碑が作られたのは後の時代のことである。中井清太夫は謙虚な人物であり、彼の統治時代には領民による功德碑建立願いに対し、代官の義務を遂行したまでのこととして聞き入れなかったとされる（高槻 2012）。

そのような清太夫の姿勢もあって、中井清太夫という名前を多くの日本人が知らない。この人物が存在し、困窮する人々を「じゃがいも」により救った歴史は確かであるが、日本史の教科書に載るような重要な人物としての位置づけは与えられていない。簡単に言えば、甲州の中井清太夫は、立派な人物ではあるが、それほど有名な人ではないわけである。しかし、そのことが言語変化を引き起こす力となる。

4. 清太夫からの変化

甲州（山梨県）においては、中井清太夫は「じゃがいも」で民を救った人物としてよく知られている。そこで、清太夫は、山梨県でセーダユー・セーダイモのように「じゃがいも」に名を残した（図 1）。ところが、山梨県から 100km 以上離れて西に隣接する岐阜県北部の飛騨地方にも「じゃがいも」はその名とともに広まったものの、清太夫は有名な人物ではなかったために、その名前そのままでは定着しなかった。

仙台は近世から現在に至るまで、東北地方最大の都市である。東北地方であるから冷涼な気候がイメージされる。救荒作物としての「じゃがいも」と「仙台」は、「寒さ」をキーにつながる。そこで、「じゃがいも」の清太夫は、岐阜県飛騨地方において、より広く知られ、また、名前が類似する「仙台」に置き換えられ、センダイイモとなった（図 1）。言語の変化としては、音の類似性による類音牽引と、「寒さ」のイメージによる民間語源が働いたことになる。

なお、飛騨地方の方言形については当地の代官、幸田善太夫（こうだぜんだゆう、任期：1745～1750 年）に求める説もある（岐阜県 1968、伊藤 2008、財団法人いも類振興会編 2012）。この場合もやはり「仙台」に置き換えられる変化があったと考えられる。

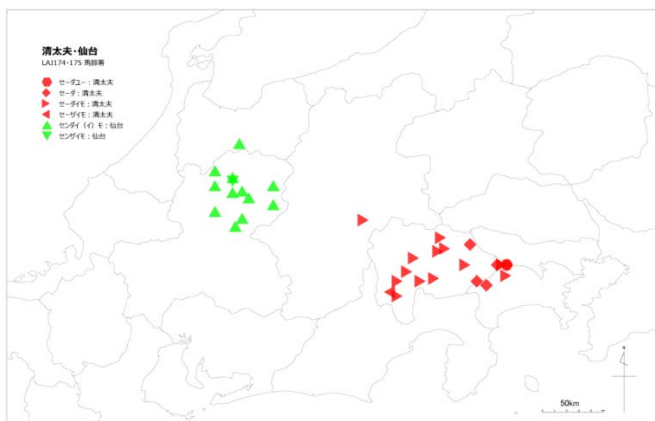


図 1 「じゃがいも」の清太夫と仙台

5. 甲州から江州へ

救荒作物の「じゃがいも」は、甲州から広まった。そこで、おもに中部地方で、コーシュー・コーショイモと呼ばれた。その一方で「江州（ごうしゅう）」（現在の滋賀県）に基づくゴーシュー類（ゴーシューイモ・ゴーシイモ・ゴーシ）は西日本に分布する（図 2）。

「甲州」は西日本から遠く、西日本の人々にはあまり馴染みのない地名であった。そこで、「甲州」に音が似ていて西日本に近く、かつ「近江（おうみ）商人」（江戸時代を中心に活躍した商人たちで、現在の大手商社の基盤にもなっている；江頭 1959、渡辺 1980）により全国的にもよく知られた「江州」に置き換えられる変化が起きた。

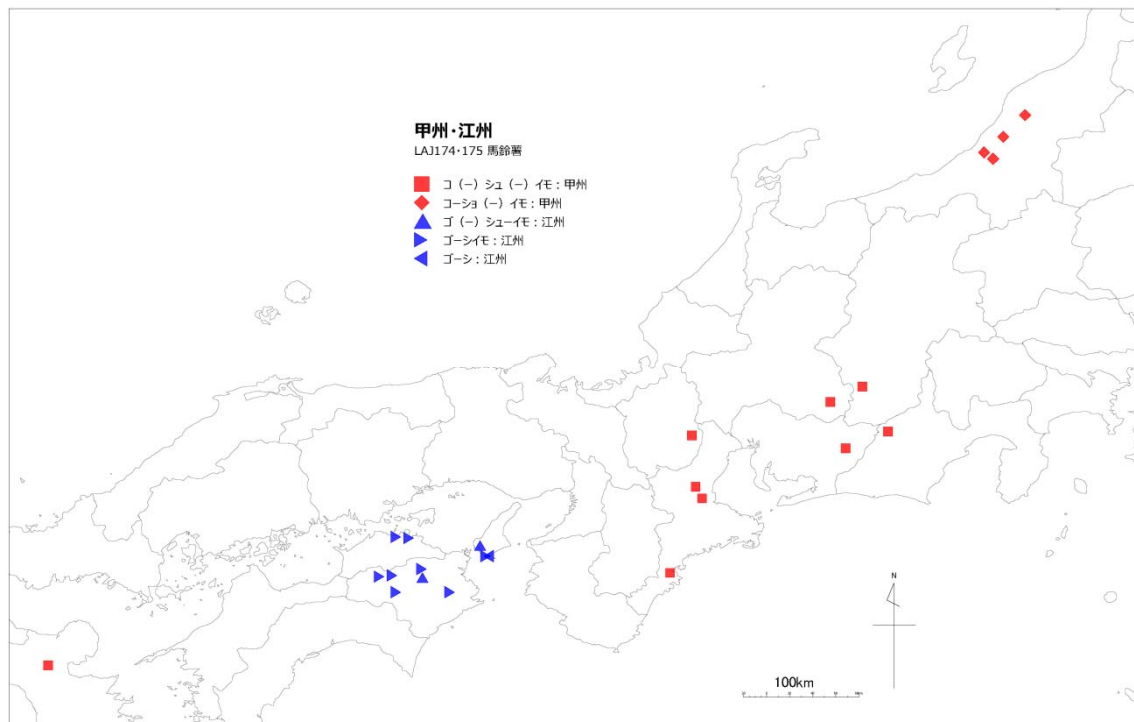


図 2 甲州から江州へ

6. 甲州から孔子、弘法へ

「孔子」や「弘法大師（空海）」のような日本国内外の歴史上の偉人の名が「じゃがいも」方言に当てられることもあった（図 3）。

コーシイモは「孔子」に該当するが、もとは「甲州」であったと考えられる（沢木 1979）。救荒作物「じゃがいも」の草分けの地から離れると、それほど有名ではないために良く理解されない地名「甲州」は、饑饉から人々を救う救荒作物への敬意により、似た音の「孔子」へと置き換えられた。

そのような作物に対する敬意は、「甲州」の語頭のコとのつながりから類音牽引を引き起こし、「甲州」をコーボー・コーボーイモ（弘法大師：仏教の宗派である真言宗の開祖、空海）に変化させた。「弘法」に置き換えられた元の「甲州」が、中部地方（越前・美濃）や中国地方（備後・山陰）であまり馴染みのない名前であったことが効いていると考えられる。

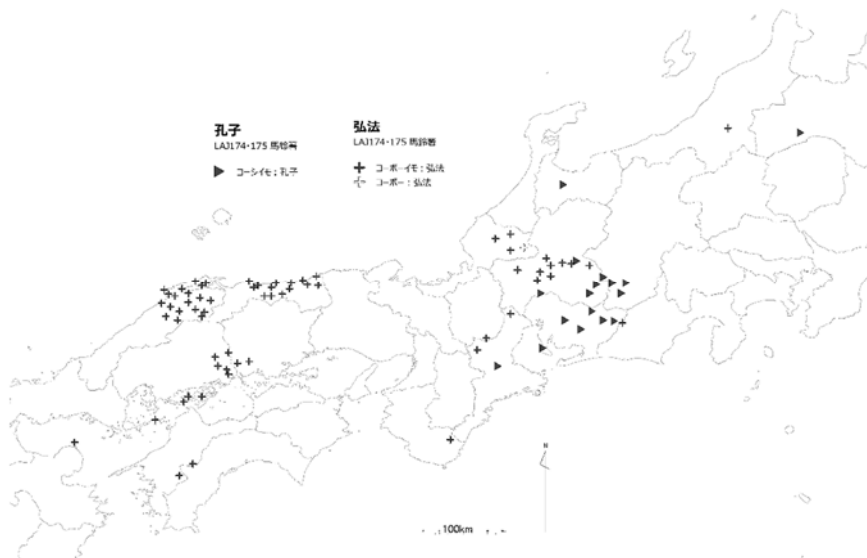


図3 甲州から孔子・弘法へ

7. 数量詞への変化

「じゃがいも」は、冷涼な気候に強いとともに、豊富な収穫量と二期作が可能な性質を合わせ持つ。そのことで「江州」(<「甲州」)は、《量》や《回数》という数量詞に変化した(図4)。

「甲州」から変化した「江州」は、東北北部から北海道において、ゴショー(五升)へと変化した。救荒作物「じゃがいも」の生産《量》の多さを表す名前に変化した。近世の東北地方において「江州」の近江商人が活躍していたこと(末永 2000)を考慮するなら、かつては「江州」に相当する名称が東北地方にも分布していたと推定することも可能である。

二期作が可能な救荒作物「じゃがいも」は、収穫の《回数》からニドイモ(二度芋)とも東北地方で広く呼ばれた。「量」を表すゴショーと「回数」を表すニドが混交(blending)することで、新たにゴドが生み出された(ゴショー+ニド→ゴド:東北地方日本海側)。ゴドの背景には「五斗」(東北方言では語中のtが有声化してdになる)「五度」という意識があり、収穫の《量》と《回数》が強化された。

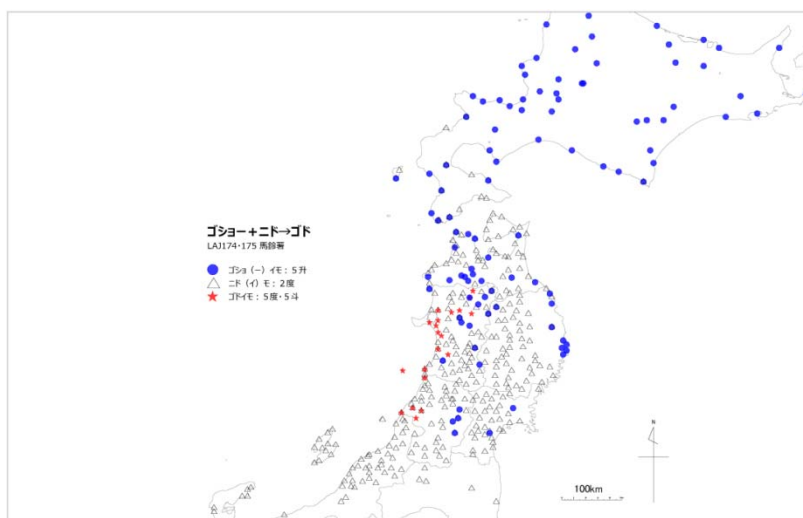


図4 数量詞による変化

8. 固有名詞への回帰

ゴロという形を語頭に持つ一連の「じゃがいも」の方言形が確認される（図 5）。ゴは、ゴド（五斗・五度）同様に、「甲州」から変化した「江州」をもとにするものだろう。そこに「じゃがいも」の形状から、擬態語のゴロゴロの関与する名称が生み出された。

しかし、ゴロは擬態語にとどまらなかった。「芋」（イモ）という語形は、古く人名に用いられることの多かった形態素の「右衛門」（エモン）に似ていたために、人名に接近することになった（e. g. ごろいも：ごろえもん）。さらに、このことがゴローザやゴロータなどの人物を特定しないありふれた人名の固有名詞を含む語形を派生させた。

「清太夫」「甲州」という固有名詞から出発した「じゃがいも」の方言は、ふたたび、固有名詞に回帰していったことになる。

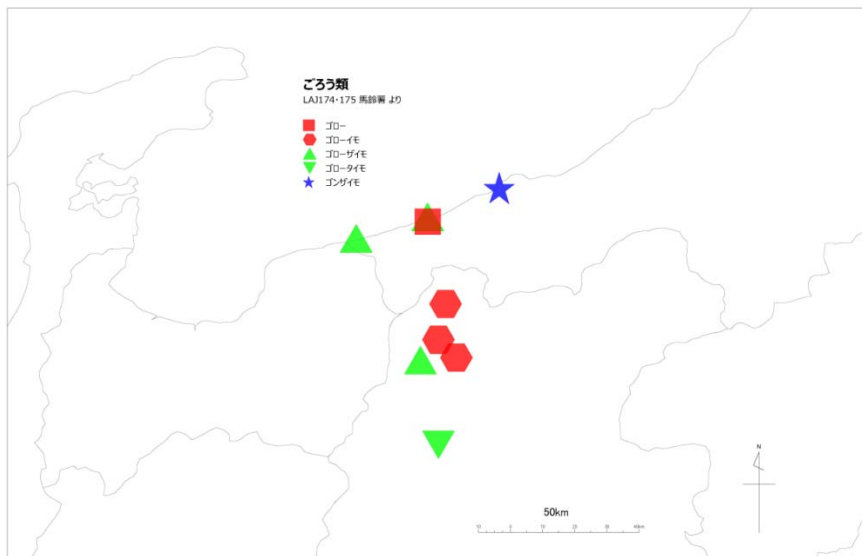


図 5 固有名詞への回帰

9. 弱い固有名詞の強い力

「甲州」の「中井清太夫」が救荒作物の「じゃがいも」を広めるもととなった。しかし、「中井清太夫」「甲州」は、ともに現地を離れると、あまり広く知られることのない「弱い固有名詞」であった。弱い固有名詞であったために、元の場所から離れた伝播先では、それぞれの地域で、音的類似性と意味や背景においてつながりを持つ、なじみのある名称・語形に変化させることになった。つまり、元の「弱い固有名詞」という特徴が、その「弱さ」により、言語変化を生み出す強い力を発揮したわけである。

10. 固有名詞の地理的特性

「清太夫」（もしくは「善太夫」）のような当初の人名に基づく名称は、もともとの由来地で用いられる（図 1）。

一方、「甲州」のような当初の地名に基づく名称は、それぞれの地名から離れた場所で用いられる（図 2）。このことは、図 6 と図 7 のように渡来作物全般（図には「さといも」も含めた）の方言に含まれる地名の分布によって確認できる。

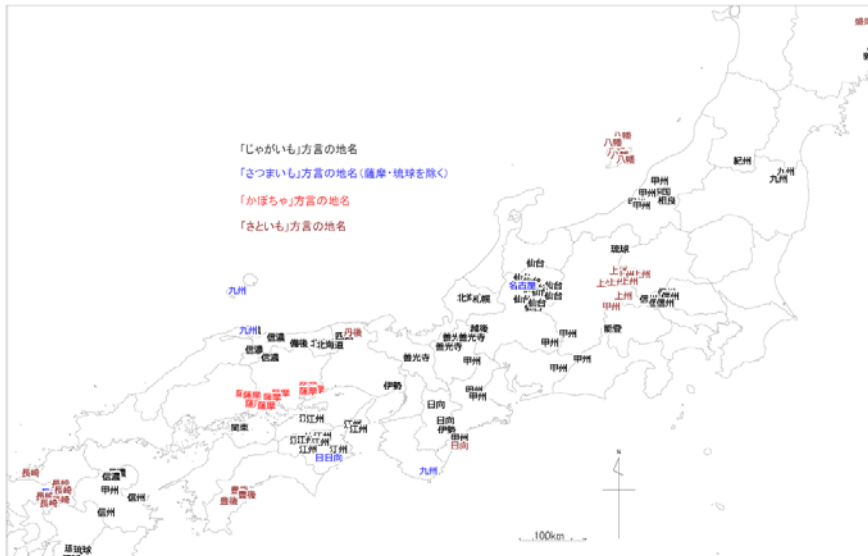


図 6 地名と方言(1)



図 7 地名と方言(2)

11. まとめ

中世末期から近世にかけて、ヨーロッパ人との交流を通して、日本を含む東アジアに導入された渡来作物の日本語（方言を含む）の名称には、固有名詞が含まれることが多い。これらの渡来作物名に含まれる固有名詞は、外国地名であることが多いが、「じゃがいも」の場合は、日本国内の地名と人名が少なからず含まれることが特徴的である。

「じゃがいも」は、特に導入の初期段階で、飢饉対策の救荒作物としての性格を強く有していた。「甲州」（地名）の「清太夫」（人名）は、もっとも早い時期に、普及に貢献した人物であった。しかし、「甲州」という地名も「清太夫」という人名も全国的に広く知られることのない弱い固有名詞であった。あまり知られていないために、もとの場所から離れた伝播先ではそれぞれの場所で理解しやすい形に変化させて受け入れられることになった。つまり、弱い固有名詞の弱さが、言語変化においては強い力を発揮することになった。

変化の過程のあらましを示すと次のようである。

「清太夫」→「仙台」（寒さ）
「甲州」→「孔子」「弘法」（救荒作物による救いへの敬意）
→「江州」（広く知られる地名）
→「五升」（量）－（「二度」と混交）→「五度」（回数）
→「五郎」（人名に回帰）

人名と地名はともに固有名詞ではあるが、それらが作物のような物の名称に用いられる際には、異なる地理的条件が働く。人名は元の場所で用いられやすいのに対し、地名は元の場所から離れた場所で用いられやすい。この条件の下で、上記の変化を継的に起こした結果、「じゃがいも」方言の語形と分布が形成されたと考えられる。

文献

伊藤章治（2008）『ジャガイモの世界史』中公新書

江頭恒治（1959）『近江商人』弘文堂

大西拓一郎（2018）「交易とことばの伝播—とうもろこしの不思議を探る—」『日本語学』37-2

岐阜県（1968）『岐阜県史 通史編 近世 上』岐阜県

小林貞夫（1987）「神に祀られた芋代官」『郡内研究』1

財団法人いも類振興会編（2012）『ジャガイモ事典』全国農村教育会

佐藤亮一（1979）「物の伝来と名称の伝播—渡来作物をめぐって—」『言語生活』312

沢木幹栄（1979）「物とことば」徳川宗賢編『日本の方言地図』中公新書

末永國紀（2000）『近江商人』中公新書

高槻泰郎（2012）「中井清太夫という男」『神戸大学経済経営研究所ニュースレター』119

手塚寿男編（1978）『郷土史事典 山梨県』昌平社

宮本常一（1962）『甘藷の歴史』未来社

柳田国男（1930）『蝸牛考』刀江書院

柳田国男（1940）『野草雑記・野鳥雑記』甲鳥書店

山本紀夫（2008）『ジャガイモのきた道』岩波新書

渡辺守順（1980）『近江商人』教育社歴史新書

Title:

Dialectological distributions and changes of words for ‘potato’ in Japanese: The strength of weak proper nouns

Abstract:

The potato is one of the New World food plants like sweet potatoes, red peppers, corn, and pumpkins that originated in Central and South America and were imported to Asia via Europe in the sixteenth century. Among these imports, the potato is thought to have spread in Japan late, since a word for ‘potato’ was not included in a dialectal dictionary published in the late eighteenth century and it shows a greater variety of dialectal names than other imported food plants. Many of the dialectal names of imported food plants contain foreign place-names. On the other hand, dialectal words for ‘potato’ frequently contain domestic place-names and persons’ names, which are seldom or never seen in the names of other imported food plants. The names of the potato played an important role in language change. The place-name *Kooshuu* and personal name *Seidayuu* arose with the spread of the potato as a hardy crop; however, neither of them is well known in other places. The unfamiliarity, in other words weakness of these names caused them to undergo adaptation when borrowed into the dialect of the accepting region with language change, since the acceptors of these words changed them to make them easier to understand in each place. Geographical characteristics are found in the dialectal distributions of names of imported food plants, including proper nouns; place-names do not spread to related places but persons’ names do. The geographical distributions and changes in dialectal names for the potato can be described based on these factors.